

第32回甲南英文学会研究発表会レジュメ

研究発表 13:00~16:30

[英語学部門] 221 講義室

司会：中谷健太郎 (甲南大学)

1. 現代英語における動詞移動

乾 拓也 (甲南大学大学院博士後期課程)

よく知られているように、現代英語において動詞移動 (Verb Movement) は生じないが、かつての英語 (初期近代英語) では顕在的な動詞移動が生じていた。例えば、Shakespeare 英語では否定文、疑問文において本動詞が否定要素の前及び主語の前の位置に移動していた (*I speake not this in extimation./What say'st thou a Hare?*)。しかし、このような構文は現代英語では容認されず、助動詞の *do* が義務的に挿入される (*I do not speak this in estimation./What do you say a Hare?*)。この歴史的变化の事実は一般的に「屈折要素の豊かさ」の変化によるものとされてきた (*Rich Agreement Hypothesis*; Lightfoot 1991, Roberts 1985; 1993, Rohrbacher 1994)。つまり、屈折を示す一致要素の豊かな言語 (現代フランス語やイタリア語) は動詞移動を内在し、乏しい言語 (現代英語) は内在しない。よって、英語は屈折的に豊かな言語から乏しい言語に変化したことになる。

しかしながら、屈折の乏しい現代英語においても顕在的な動詞移動を示すような例がいくつか存在する。

(1) a. *though I know not what you are. (Twinkle, twinkle, little star)*

b. *Cast not pearls before swine. (the Bible)*

c. *Ask not what your country can do for you, ... (John F. Kennedy)*

d. *Why worry about Europe when you can pop to the moon? (Independent)*

本発表では、これらのような例を生成統語論の観点から再検証し、動詞移動のプロセスを考察する。また、上記のような例が現代英語においてどれほど生産的であるのかを検証するために、統計データを示す。そして、これらの例における動詞移動は形態統語的特性 (素性の強弱やパラメーター値) からではなく、動詞自体の語彙的特性 (発話動詞や精神活動動詞) または文脈的特性 (レジスター) によって引き起こされると考える。

2. Re-Use 概念を土台とした CAT 分析

根之木朋貴 (甲南大学非常勤講師)

本発表は、これまで様々な省略・削除現象などに対処してきた CAT 分析 (Confirmation

Phrase+Answer Phrase+TP 削除の組み合わせ分析)がさらなる削除現象にまでどこまで拡張できるのかについて検証することを目標とする。主に(1a)タイプの削除文とその内構造(1b)を取り上げる。

(1) a. They were firing, but at what was unclear.

b. They were firing, but [CP at what C [TP _____]] was unclear

(1)に関して、これまでのミニマリストプログラムに基づいた研究では Merchant (2001)、Romero (1998)、Howard Lasnik (1999)などで多く見られる identity あるいは e-givenness の下での削除操作という形で分析されてきた。ここでは主に、これらの考えを継承しつつも新たに Re-Use という削除文の非頭在的復元という操作を考慮に入れた概念を採用した Chung, Ladusaw, McCloskey(2011)(以下 CLM(2011)) を検証する。

(2) [CP at what C [TP they were firing]] → [CP at what C [TP they were firing *at what*]]

CLM(2011)では(2)は Phillips (2003)の枠組み内で、前置詞句(at what)は軽動詞により直接支配されるという動詞特性と Chomsky(2001)の内併合の過程を組み合わせ、新たに Re-Use という概念により TP 全体の復元を実現可能にしている。さらに以下(3-4)へ拡張できると主張している。

(3) a. He sent a package, but I can't find out who *(to).

b. [CP what C [[TP he sent it] *to what*]]

(4) a. She is jealous, but we don't know who (she is jealous) *(of).

b. [CP of who C [[TP she is jealous] of who]]

((1)-(4)CLM(2011))

(3)(4)に関して Re-Use では削除側の TP は先行文の表現(jealous, send)などの選択特性が維持される形で re-use され、identity 形成については無関係に、E-type Anaphora など代名詞解釈も可能である。

だが、本発表では re-use だけでは網羅できない swiping 文(5)も数多く存在することを指摘する。

(5) a. *He'll be at the Red Room, but I don't know what time till.

b. *She's driving, but God knows which towns to.

c. *She fixed it, but she wouldn't let us in on what tool with.

(Merchant (2002))

CLM(2011)の枠組みでは(5a-c)での省略された各動詞は選択特性を満たしており全て非頭在的 Re-Use によって TP を復元できるため全て誤って文法性を予測してしまう。

そこで本発表ではこの種の派生は素性継承体型の元、文全体(TP)が確認句(Confirmation phrase)の対象になる場合を踏まえ返答句(Answer Phrase)にまで継承した素性が移動することで Q 素性が消去され、最終的には(1)と(3-4)を正しく派生し、逆に Q 素性が確認句で認可されずに残る(5a-c)は総じて非文法として排除することを主張する。

最後に *sluicing*、*sprouting*、*swiping* などのこれまで分析では区別の仕方が曖昧化・複雑化している省略・削除現象の数々を本 CAT 分析内で全て一つの枠組に "Reduce" できるかを検証する。

休憩 10 分間

司会 有村兼彬 (甲南大学名誉教授)

3. 弾当て代換が表す移動についての再考—*extent causation* と *controllability* の観点から—

青木奈律乃 (甲南大学大学院博士後期課程)・中谷健太郎 (甲南大学)

よく知られる交替現象の一つに壁塗り交替と呼ばれるものがある。これは、移動物 (*locatum*) を直接目的語にとる移動物目的語タイプと、場所 (*location*) を直接目的語にとる場所目的語タイプの 2 つの形式の間で起こる交替のことである。

- (1) a. John smeared paint onto the wall.
b. John smeared the wall with paint.

日本語では、(2a)「(場所)ニ(移動物)ヲV」と(2b)「(場所)ヲ(移動物)デV」のように、格表示が交替することが特徴的である。

- (2) a. ジョンは、壁にペンキを塗った。
b. ジョンは、ペンキで壁を塗った。

(岸本 2001:102)

壁塗り交替とよく似た格表示交替には弾当て代換 (定延 1990) がある。弾当て代換とは (3) のように、「NP1 ヲ NP2 ニ V/NP2 ヲ NP2 ニ V」の形式で起こる交替のことである。

- (3) a. 弾を的に当てる
b. 的を弾に当てる

(定延 1990:46)

定延(1990)において(3)は弾当て代換の代表例として扱われており、事態構成物のより移動している方(弾)・移動していない方(的)の間で相互交換が起こると述べられている。しかし、「的」がヲ格をとる(3b)の容認性判断には疑問が残る。直感としては、「的」が不動であることが問題であるように見える。しかしもう一方では、移動することのないものが含まれていても(4b)のような例はより容認性が高いように感じられる。

- (4) a. ドアミラーを電柱に当てた (ことに気づかなかった)
b. 電柱をドアミラーに当てた (ことに気づかなかった)

名詞句の組み合わせによって弾当て代換の容認性が変わるのはなぜか。「当てる」「ぶつける」といった衝突使役動詞に焦点を当て、質問紙調査の結果を報告し、*extended causation* (同延的使役) と *controllability* の点から再考する。

4. 現在の中の現在（現在進行形）の未来用法について

佐渡一邦（新居浜工業高等専門学校准教授）

英語の文法においては形式と意味が一致しない現象が少なくないが、言語形式が本来と違う意味で用いられることを体系機能文法では「文法的比喩」と呼ぶ。Sado(2016)においては単純現在形が未来の意味を表す用法を文法的比喩の一例として扱う研究を行ったが、本発表では現在の中の現在（現在進行形）形が未来の意味を表す例について他の未来用法と比較し、その特徴を明らかにすることを旨とする。

まず現代英語に未来時制が存在することを確認する。未来時制は時間を線で表した場合のような過去時制の鏡像ではなく、非現実を表すという意味で現在時制と過去時制とはその性質を異にしている。1次的時制は **will** や **shall** で、2次的時制は **be going to** で表現される。屈折ではなく助動詞を用いる迂言的な表現方法にも関わらず現代英語は未来時制をもつという主張が妥当である。

現在の中の現在（現在進行形）の意味についてアスペクトの観点から分析を行う。英語のアスペクトに主に完了・未完了の区別がある。完了は動詞の意味が過程の始まりから終わりまでを表すものであるのに対して未完了は過程の一部のみを表す。その中でも、過程の途中のみを表すものが進行相であり2次的現在の中心的な意味は未完了、特に進行相であるとする。

2次的現在、特に「現在の中の現在」には中心的な意味である未完了・進行相の他にこの意味から派生した周辺的な意味もあることを確認する。丁寧さ、非難、一時的な状態や習慣などがその例である。

形式は現在形で未来の意味を表す用法を Huddleston and Pullum(2002)は未来用法(**futurate**)と呼ぶが、この用法は大きく3種類がある。Ⅰ単純現在で未来の意味を表すもの、Ⅱ単純現在で時を表す従属節のみで用いられるもの、Ⅲ現在の中の現在（現在進行形）が未来の事柄を表しているもの。Ⅱは特別な環境での用法であるのでこれを除けば、英語において未来の表現は合同な用法である **will** および **be going to** そして比喩的な用法である、Ⅰ単純現在とⅡ現在の中の現在の4種類があることになる。これらの用法の表す意味の違いを①現在との関連性②現在との時間的距離③モダリティー④アスペクトの4つの観点から比較を行う。まず①現在との関連性が一番高いのは単純現在である。例えば **Flight 106 takes off at 11.45 pm.** の場合の交通機関の時間のようにその内容は現在で知られている未来である。その次に関連性が高いのが「現在の中の現在」である。未来の出来事の手筈がすでに整えられているのがその特徴である。**be going to** は未来の出来事の起源が現在にあったり、その証拠が現在にあるものの「現在の中の現在」よりは関連性が低い。②現在との時間的距離については特に時が示されていなければ **be going to** と「現在の中の現在」は同様に近い現在を表すと解釈される。単純現在はかなり未来の内容を表す解釈も普通である。③のモダリティーについては認識用法・非認識用法の観点から用法を比較する。④ア

スペクトについては単純現在が状態や習慣を表し、現在の中の現在が未完了を表すことを比較の上確認する。

5. 最簡潔併合と名調句からの外置

古川武史 (福岡工業大学教授)

Chomsky(2013, 2014) の主張によると内的併合(**Internal Merge**)、外的併合(**External Merge**)は、どちらも併合(**Merge**)という同じ単一の操作であるとする最簡潔併合(**Simplest Merge**)という立場が取られている。この立場では併合が自由に適用され、その結果構築された構造はトランスファー(**Transfer**)や解釈のためにフェーズ(**Phase**)レベルで、評価されると想定されている。

(1) のような名詞句からの外置の分析には、文末への右方移動が関与する移動分析と外置要素が文末に直接併合する基底生成分析の2つの分析が提案されている。

(1) a. We saw a painting yesterday of John.

b. We saw a painting yesterday from the museum.

Johnson (1986) では、補部の外置は移動により派生され、内的併合が関与し、一方、付加部の外置は基底生成され、外的併合が関与することが提案されている。

(2) a. We saw [a painting *t*] yesterday of John.

b. We saw [a painting] yesterday from the museum.

本発表において、Johnson (1985) に従い、名調句からの外置を補部と付加部に分けて分析する。補部の外置の場合、補部はまずセクション(**selection**)を満たすために主要部と外的併合がなされ、その後内的併合により外置されたものと想定する。一方、付加部の外置は、Hunter and Franks (2014) に従い、遅発併合(**Late Merge**)よってホスト DP よりも上位の位置に外的併合されたものと想定する。このように補部と付加部の外置に異なる派生が係わることにより2つのタイプの外置における特質の違いが説明されることを見る。さらに、外置要素とホスト DP との局所性や依存関係がどのように説明されるのかという境界性の問題、また、外置が生じる構造にラベル付けアルゴリズム(**Labeling Algorithm**)がどのように係わるのかというラベルの問題を説明しなければならない。これらの問題の解決策として最簡潔併合を想定するラベルシステムのもと自然な説明を提供したい。

主要参考文献

Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130:33-49.

Chomsky, Noam. 2014. Problems of projection: extensions. Ms. MIT.

Hunter, Tim and Robert Franks. 2014. Eliminating rightward movement: extraposition as flexible linearization of adjuncts. *Linguistic Inquiry* 45:227-267.

Johnson, Kyle. 1985. A case for movement. Ph.D. Dissertation, MIT.

[英米文化・文学部門] 223 講義室

司会 横山三鶴 (甲南大学非常勤講師)

1. シェイクスピアの「テキスト」とは何か

杉浦裕子 (甲南大学)

シェイクスピア劇を原文で読む際に問題となるのが、自分が読んでいるテキストはどの版に基づいて編纂されたものか、という問題である。シェイクスピアの時代、劇の出版はクォートと呼ばれる四つ折り版として個別に出版されるのが主流であったが、シェイクスピア劇には、1623年出版のファースト・フォリオと呼ばれる二つ折り版の全集も存在する。劇によってクォート版(以下 Q と表記)と第一フォリオ版(以下 F1 と表記)の両方に存在するもの、F1 のみに存在するもの、第一クォート版(Q1)と第二クォート版(Q2)といった複数の Q に存在するものなどがある。ある一つの劇が複数の版で存在する場合、テキストの中身が大きく異なることもあるため、特に 20 世紀以降、Q と F の関係といったテキスト研究がシェイクスピア研究の中で大きな位置を占めてきた。

本発表では、まず複数の版のテキストの違いについて『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『ヘンリー5世』『リア王』などで具体的に概観する。その後、18世紀以降から現代に至るまでのテキスト編纂・テキスト研究の流れを、本学の図書館所蔵の資料や近年の研究動向に触れながら説明し、そもそもシェイクスピアの「テキスト」とは何かという話をしたい。

2. Esther の歩み : *Bleak House* における病とケア

山崎麻由美 (神戸常盤大学教授)

Bleak House (1852-53)が執筆された時期、子どもに関する2つの記事が *Household Words* に掲載される。一編は子ども専門病院である Great Ormond Street Hospital が 1852 年開院したことに関する 'Drooping Buds' (April 1852) であり、もう一遍は London の Foundling Hospital についての 'Received, A Blank Child' (March 1853) である。当時 Dickens が病気の子どもや孤児や達に寄せていた関心は *Bleak House* にも描かれている。実際、作品には比喩的な意味合いも含めて病む子どもや孤児達が描かれている。Ada と Richard、Esther の小間使いになる Charley、母親から顧みられない Caddy Jellyby、浮浪児 Jo などである。そして何よりも語り手の Esther 自身が孤児であり、Jo がもたらした天然痘に罹り、生死をさまよった末、容貌がすっかりと変わるといった試練に見舞われるのである。

Bleak House を Esther を軸にして読む時、彼女がケアを与える者として描かれていることは明白である。Esther は病人を看護する者として描かれているわけではない。Charley が天然痘に罹った時の親身な看病の結果、彼女自身も罹患してしまうため、身体の看護的側面が強調されているが、彼女はいかなる時も相手を慰める存在であり、“caregiver” と捉えることができる。また Esther は母親的な存在として描かれているわけでもない。Esther と出会って間もない Ada が彼女を評して、“You are so thoughtful ... and yet so cheerful! And you do so much, so unpretendingly!” (Chapter IV) と言うが、それは愛情あふれ相手を包み込む母性というよりは、少し離れた立場で手を差し伸べる者である。そしてそのことが Esther を実年齢よりも上に見せ、彼女は *Bleak House* では “Dame Durden” あるいは “dear little old woman” と呼ばれている。また初めて登場した時に彼女は自分のことを ‘... I know I am not clever.’ (Chapter III) と述べているが、彼女が作品の一方の語り手であることを忘れてはならない。彼女はすぐれた観察眼をもっており、物事を冷静に公平に見ようとしている。それは caregiver としての彼女の特性の一つだと言えるだろう。

幸せでない子どもたちは、Esther に引き寄せられる。寄宿学校でも彼女は学校になじむことができない下級生達に頼られ、また初めて会った Caddy Jellyby は Esther に ‘I am so very miserable, and I like you so much!’ (Chap. IV, p.45) と打ち明ける。また、Caddy の弟 Peepy が Esther になつくことや、何より、Ada や Richard は彼女を信頼し頼りきっているのである。

Esther が相手から距離をとるように成長したのは、育った環境によるところが大きい。彼女は厳格な叔母に ‘Submission, self-denial, diligent work, are preparations for a life begun with such a shadow on it’ (Chapter III) と言われ、愛情を受けずに育つ。Esther は幼いながら ‘industrious, contented, and kind-hearted’ であろうと努力するのである。また叔母の死後に六年間過ごした寄宿学校は ‘precise, exact and orderly’ だという環境も彼女の性格形成に大きな影響を与えただろう。つまり外因的要素のために、彼女は自己鍛錬を経てケアを与える者へと成長していったのである。

こうして Esther の歩みは、彼女のもとへ集まってくる者たちをケアする役割を果たすことで進んでいく。最後に Esther が Allan Woodcourt 医師と結婚することは象徴的である。ケアと医術がひとつとなることで、新しい癒しの場が生まれたからである。